

シンポジウム

研究の質—そのクライテリアとマネジメント

司 会 島 弘 志

(1) 基調講演

日本に基礎科学は定着したか

小 田 稔 理化学研究所

(2) 事例報告

研究から実用化まで

戸 田 巖 富士通

「ホンダに於ける研究と開発のマネジメント」を通じて

平 松 竹 史 本田技術研究所

企業における基礎研究—NECの事例から—

加 藤 康 雄 NEC

R&Dの一つの提案—KASTのTrial—

額 田 健 吉 神奈川科学技術アカデミー

(3) 総合討論

コメンテータ

関 成 孝 通商産業省

南 正 名 東芝

生 駒 俊 明 東京大学

趣 旨

研究開発のマネジメントとは広義の資源であるヒト・モノ・カネの最適な組み合わせを考えることにほかならない。研究開発費が設備投資を上回る傾向は製造業が創造業へ転身を図ること等、研究開発資源としての資金については漸次改善の方向に向かっていると考えることができる。一方、理工系学生の博士課程進学率の低下、若年層人口の絶対数の減少等、特に研究者に係わる課題は山積した状態で、これを解決するための具体的方策について必ずしも合意ができていないとも言えない。さらに現実的な問題として、有力企業による研究開発の推進に際し、多大の資金と大学卒業者の大量雇用による研究人材の投入がその結果として質の高い研究成果を創出することになるとは考えがたい。

研究の質の向上のためには、優れた研究者を確保し、また研究者の資質を十分に発揮できるような環境の整備、活用の方法等、研究者の質に関するマネジメントが重要である。知的資源としての研究者が限られた資源であるという認識に基づき、知的資源を有効に活用し、またこれを活性化するための方策、研究者のモラルを含めた研究者の質を視点とした議論が、「研究の質」について検討する際の新たな切り口であると考えられる。

このため、まず「研究の質を問うためのクライテリアは何か？」を明確にし、そして「そのクライテリアに基づきどのようにマネジメントを行うか？」について十分議論を重ねる必要がある。

かかる背景から、「研究の質の高さ」を「研究者の質の高さ」と「質の高い研究者のマネジメント」という視点に設定し、そのクライテリアについて共通の認識を得、これに基づく新たなマネジメントについて率直な意見交換を行うための場として、今回のシンポジウムを位置づけたい。